

校長あいさつ

沖縄県立八重山高等学校 校長 仲舛盛順

八重山高校は、八重山郡民の熱い思いを受け1942（昭和17）年の4月1日に創立され、現裁判所西隣の瑞泉社屋を仮校舎とした。5月15日に初代校長平良文太郎氏が発令され、5月24日に開校式並びに始業式が挙行された。八重山高校は、沖縄県立八重山中学校と沖縄県立八重山高等女学校をその母胎としており、1947（昭和22）年の学制改革により2校は統合され八重山高等学校となった。八重山高等学校は、今年76年目を迎える八重山地区唯一の普通科高校（1学年6クラス）である。校訓は「学徳」「進取」「雄飛」で、「師弟同行」を校是とした教育活動を推進している。

ここがすごいぜ、八重山高校！

～毎月1回、八重山高校の歴史・実績・良い所等を綴ります～
（記述内容に間違い等ありましたら、八重高までご連絡ください！）

八重山高校発展クラスの設置決定は、31年前の12月！

八重山高校の発展クラスは、昭和63（1988）年4月に始まった。当時の4月13日の新聞には次のような記事がある。

「八重山高校（盛小根英順校長）は、生徒一人ひとりの学力に応じた指導を行い、適正な進路指導を図るため、今年度から各学年に発展クラスと一般クラス別の学級固定習熟度制を実施することになり、13日から発展クラスの早朝講座をスタートさせた。・・・（中略）・・・具体的には、発展クラスは各学年1クラスで1年生は入試の成績と内申の結果をもとに選考し、生徒と父母の意思を確認して編成した。また2・3年生の発展クラスは年間7回にわたって行われたテストの結果にもとずき生徒の承諾を得て編成された。・・・（中略）・・・県内では同校のほかに那覇、首里東、南風原高校でも発展クラスが設置されているが、その中で課外授業を義務化したのは八重山高校が初めて。・・・（中略）・・・同校の宮城圭一郎教頭と仲舛勲教務主任は、教師はヤル気十分なので、生徒がこれにどこまでついてきてくれるかがカギ。2・3年ですぐにその成果は出てこないが、継続することで効果が現れる」



では、八重山高校に発展クラスを置くことが決まったのは何時なのだろうか。前年の昭和62（1987）年12月18日の新聞に次のような記事がある。

「職員会議で正式に決定。八重山高校（盛小根英順校長）は、来年度から学力別の特別教室（仮称）を設ける。これは15日の職員会議で正式に決まったもので、同教室は各学年に1クラス、その他はこれまでと同じ普通クラスで、クラスの編入替えは1年に1回。
・・・（中略）・・・八重山高校は郡内唯一のいわゆる進学校。しかし今年、同校は進学率そのものは高かったものの、よく学力の目安とされる琉球大学への推薦を除く現役合格者が1人もおらず、郡内外に少なからずショックを与えた。だがそれ以前に、八重高は去年7月に学力対策検討委員会（委員長・新本洋允教頭）を発足させ同年12月中旬、職員会議に特別クラスの設置を提起したが、三分の二以上の賛成に至らず否決された。その後この問題は継続審議となり、さらに今年6月、同委員会のメンバーを替えて再発足させ、15日の職員会議にはかったところ、大多数の賛成で正式決定した。これらの経緯について新本教頭は、職員の三分の二以上の賛成を必要としたのは、職員は今でも泊通信制の生徒の授業など他校にない負担がある上に、さらに早朝講座を必須とする特別クラスが出来たのでは労働過重となり、職員の一致協力がなくしてはスタートできないためと説明。」

発展クラスが始まる2ヶ月前の昭和63（1988）年2月3日の新聞の社説に、次のような記事が載っている。

「発展クラスに期待。共通一次に続いて1日から国公立大学の二次試験願書受付も始まり、入試シーズンもいよいよ本番を迎える。このところ、入学試験と言えば、八重山では児童生徒の学力問題がクローズアップされ、特に中・高校生のそれが教育界は無論、社会問題にまで発展。昨年7月には教育フォーラムまで開催され、郡民の関心も大きく高まった。こうした社会現象も起因し、県立八重山高校（盛小根英順校長）では、この4月から新しい方法の学級固定習熟度制を導入することになった。つまり、大学進学に向けての受験学力対策として、仮称発展クラスを各学年に1クラス設け、合格率を高めようというもの。従ってそのねらいは、個々の生徒の学力に応じた指導を行って学習効果を高め、適性や進路と学習の定着度に応じた進路指導の徹底を図るとしている。・・・（中略）・・・今回の発展クラスも単に受験学力対策というだけに目を向けず、個々の生徒の可能性を最大限に伸ばす機会としてとらえ、差別・選別という見方は避けてもらいたい。そうすることが、発展クラス外の生徒にも良い刺激となり、それを契機に伸び悩んでいる子どもらの可能性を伸ばすことになるものと考え、そうなることを期待したい。」

開邦高校が開校したのが昭和61年4月、その2年後の昭和63年4月に開校した八重山高校発展クラス（球陽高校はその1年後の平成元年4月開校）。先輩方の産みの苦しみも理解しながら、八重山高校のさらなる発展のためには何が必要なのか、31年経った今、創立80周年を4年後に迎えるにあたり考える時期に来たと思う。

平成30（2018）年 12月

八重山高校の創立記念日は、

11月11日から4月26日に変わりました！

八重山高校は、1947（昭和22）年5月24日に開校式並びに始業式を挙行している。そして、同年10月6日に現在の敷地（元八重山高等女学校敷地）に移転し、11月11日に開校記念式典と祝賀会を行っている。

八重山高校の創立記念日の記録を探してみると、1964年～66年度の学校要覧に「開校記念日」との記述が11月にある（何日とは書かれていない）。そこで創立5周年記念誌をみてみると、そのなかで創立当時の教諭である上江洲永芳氏は、創立記念日について次のように述べている。

いよいよ引っ越しが落ち着くと創立記念式をあげなければならぬという話し合いが持ち上がり1947年10月15日に創立記念事業期成会が結成されて、11月11日創立記念式を挙行することになった。なぜこの日を創立記念日に選定したかというと

- (1) 約一ヶ月位の準備期間を置いて11月中旬頃が適当と考えられた
- (2) 1という数字は物事の始まりであり、基礎であると同時に全体を意味し縁起のよいめでたい数字であるから11月11日は数列の上から極めてめでたい日と考えられる
- (3) 第一次世界大戦のパリ平和会議が締結された日で平和の日である
- (4) 学校記念日として将来といえども行事を取り行うのによい時期である

それ以降、八重山高校は1947年11月11日を創立記念日として「創立5周年記念誌」「創立15周年記念誌」「創立30周年記念誌」を発行し記念式典も実施してきた。

ところが、創立45周年記念式典と記念誌は1987（昭和62）年に実施している。本来なら創立45周年は1992年である。つまり創立45周年からは、1942（昭和17）年を創立年としており、途中から八重山高校の創立年が変わっているのである。

記念誌にある当時の盛小根英順校長の式辞によると

「長年の懸案になっておりました旧制両校の処遇と創立記念日について関係者で話し合った結果、今回から創立記念日を旧制から起算することになり、本日創立45周年のめでたい日を迎えることになりました」とある。

当時の入富西 整 尚志会会長のあいさつには

「今回の創立記念事業をを通し、尚志会にとって特筆すべきことがございます。それは、永年の懸案であった同窓会を一体化することが出来たことです。これまで本校は、学制改革が施行された昭和22年を以て創立年と位置づけ、数々の記念事業等を執り行い、また、同窓会である尚志会も新設になった八重山高等学校に在籍した者のみで組織し活動してきました。そのことに関し、旧制並びに旧制と新制の狭間でご苦勞なされた先輩方がないがしろにしているとの声があり、尚志会にとっては命題とするところでありました。

幸いにも今回の記念事業を執り行うに際し、多くの先輩方の温かい思い遣いにご苦勞により45年の歳月を経た今年、同窓会を一本化することが出来ました。それに伴い本校の創立年を沖縄県立八重山中学校、公立八重山高等女学校が開校された昭和17年に遡ることと意思確認し、記念事業の名も創立45周年と相なった次第であります」とある。

それに伴っての変更なのであろう、本校の学校要覧の沿革の1992（平成4）年9月9日の欄に、「八重山高校の創立記念日を4月26日に決定（記念日を、県立八重山中学校第1回入学式の日とする）」との記述がある。当時は仲山忠享校長で、1942年を創立年とした時、1992（平成4）年は八重山高校の創立50周年の年となる。その年に創立記念日を新たに制定したことの意義、八重山高校の前身が沖縄県立八重山中学校と公立八重山高等女学校であることによる創立記念日の4月26日への変更は、理にかなっている感がある。

最後に、八重山高校の創立80周年は、2022（平成34）年である。八重山高校の歩んできた歴史と伝統・文化を一覧できる場所が必要だと感じるのは私だけであろうか。

平成30（2018）年 11月

八重高テニス部が躍進した新人大会！！

今月末から沖縄県高等学校新人体育大会が開催される。9月に開催された高校新人陸上競技大会を含めいくつかの競技が先行実施されたが、多くの競技は10月27日から開始される。

今から30年前の1988年10月に開催された「昭和63年度県高校新人体育大会テニス競技」は、初の石垣島での開催であった。男子24校、女子29校が参加したこの大会は、石垣市宮庭球場や南西グランドホテルコートで22日から24日まで白熱した試合を繰り広げた。豊川博行監督率いる八重山高校テニス部は、男子が3位決定戦で首里高校を八重高校3-0首里高校で破り3位となった。女子は、準決勝で宮古高校を破り初の決勝進出を決めた八重山高校と、大会6連覇を狙う第1シードの大平高校（現陽明高校）が決勝で対戦し、結果は次のようであった。

女子決勝戦

ダブルス1 玉城京美・島袋円 （大平）2-0 前石垣美和・宮良貴子（八重山）

ダブルス2 伊波雅代・上間千賀子（大平）2-0 入嵩西利子・花城みわ（八重山）

シングルス 玉城京美 （大平）2-0 前石垣美和 （八重山）

結果は、大平高校3-0八重山高校であったが、女子は九州大会への出場が決まった。八重山高校テニス部を指導して6年目となる豊川博行教諭は、「今年は1年生が充実していて、これに先輩の2年生たちが負けられないと気を引き締めて取り組んできた結果だと

思う」と述べている。

今年の新人大会で、後輩の八重高生はどんな活躍を見せてくれるのか、校長として八重高生の活躍を大いに期待している！！



準優勝の女子と3位の男子

平成30（2018）年 10月

尚志会藝能祭はすごい！！

八重山高校には、尚志会という同窓会がある。その尚志会の沖縄支部であった尚志会沖縄支部は昭和43年に発足し、平成2年に会の名称を沖縄尚志会と改め今年で結成50周年を迎えた。その沖縄尚志会の第16回藝能祭が、去った9月9日（日）浦添市てだこホールで開催された。沖縄尚志会の藝能祭は昭和63年に第1回を開催し、2年に1度の開催を継続し今年で16回目を迎えた。ひとくちに16回と言っても32年目になるわけで、1高校の同窓会が32年にわたり16回も藝能祭を開催することは他に例がない。この藝能祭は、古典芸能（写真は今年の古典芸能）を始め母校出身アーティストや八重山の島々の芸能を組み入れながら、ふる里への思いと活力溢れる内容を目指している。

尚志会は、他にも関西尚志会と東京尚志会の支部があるが、同窓会の結成とその名称の曰わくについては、八重山高校創立45周年記念誌に次のように載っている。



八重山古典芸能の一場面

同窓会結成とその名称（大島 修 初代会長）

八重山高等学校同窓会が結成されたのは、昭和26年の夏で、3期生まで卒業してからであった。琉球大学に行っていた1期卒業生の糸数長芳（高校長）、屋部憲一（会社社長）をはじめ、多くの卒業生が夏休みで帰省しており、糸数・屋部氏らを中心に結成準備が進められ、白保中学校に勤務していた私にも連絡、相談があった。

（中略）

同窓会の名称のことがもちあがったのは、確か結成三年目であったと思う。八重山農林高校同窓会が「みずほ」、首里高校が「養秀」、那覇高校「城岳」、名護高校「南燈」と、それぞれ名称があるように、我々の同窓会にもとの声があったからである。早速、同窓生や職員、関係者に諮り、募集したところ、尚志の他に八洲、若鷺、尚学、於茂登、南

海、南邦、海南等々二十近く集まっていたと記憶している。この「尚志」は、旧職員で当時白保中学校長であった元立法院議員故森田次郎先生の提案であった。先生の説明によると、「尚志」の出典は、孟子、尽心の中から取ったとのこと、「志をたかくする」ということであるとのこと。講堂の「尚学館」が「学をとつとぶ館（やかた）」ということに呼応して「尚志会・志をたかくする会」とし、無限の希望、遠大な理想をかかげ生々発展する会とのことであった。（以下省略）

八重山高校同窓会の尚志会が結成され、今年で67年目を迎える。3年後には結成70周年である。尚志会の会員は、沖縄県立八重山中学校、公立八重山高等女学校、八重山初級高等学校、八重山高等学校附属中学校、及び八重山高等学校に在籍していた方々である。70周年を機に、各自が持っている八重山高校の歴史資料を集め、時系列で一覧できる資料室があればと、校長として切に願うばかりである。

平成30（2018）年 9月

校内にある当時に偲ぶ像や施設

八重山高校の校内には説明板がない像や施設がいくつかあり、外部の方々から質問されたときに説明に苦慮する事が多い。先日も、「聖火の像は、元体育教師の嘉数重夫氏がモデルではないか？」と言う問い合わせがあった。2年後の東京オリンピックの聖火リレーが話題になっている時期なので、前回の東京オリンピックの聖火リレーに関する出来事を調査している方からの問合せだったようである。私自身も、校内巡視時に気になっていたもので、創立45周年記念誌と創立60周年記念誌、1962年度から残っている学校要覧を調べてみた。まず、校内にある4体の像はすべて八重山高校第5代校長の平良泉幸氏の作品であることが当時の学校要覧に記されている。以下、時系列で制作年月日を記しておく。

- 1963年3月27日 第5代校長 平良泉幸氏赴任
- 1963年9月12日 師弟同校像建立（平良校長作）
- 1964年3月23日 読書像建立（平良校長作）
- 1964年8月19日 健康像建立（平良校長作）
- 1965年7月29日 大鷲の像建立（平良校長作）



因みに、1964年は前回の東京オリンピック開催の年である。創立記念誌の1964年のページには上にある聖火リレーの写真があるが、説明文がないため誰が写っているのか？どのなのか？いつの写真なのかも分からない。ただ、健康の像は誰が観ても聖火リレーの像であり、八重山でも聖火リレーがあったことがわかる、どなたか写真に関する情報提供をお願いしたい。



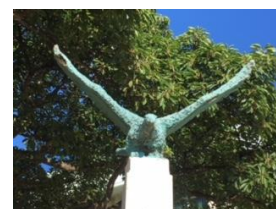
師弟同行の像



読書の像



健康の像



大鷲の像

右の写真は、校庭にある手洗い場跡（今は使用していない）である。先日、第19代校長の石垣久雄氏が本の寄贈で来校した。その際、この手洗い場の話になり「校舎改築の時、昔の施設で残っているのはこの手洗い場だけなので何とか残してもらった。今後もそのまま残してもらいたい」とのお話があった。石垣氏は1955（昭和30）年八重山高校入学で、入学時には手洗い場はもうあったと言われた。調べてみると、1952（昭和27）年の創立5周年記念誌に、手洗い場は載っていない。1962（昭和37）年の学校要覧には、教室配置図の中に手洗い場があり、施設一覧の中に水道施設1とある。それからすると、この10年の間に手洗い場が作られたことになる。創立記念誌の中に、八重山の主な出来事の1957（昭和32）年6月22日に上水道通水記念碑除幕式挙行とあるので、その前に作られた可能性があるが、校庭にある手洗い場に関する記述は見つけることができない。説明板をつけ、その存在意義を後生に残したいのだが何とかならいだろうか・・・。



校庭にある手洗い場の跡

平成30（2018）年 8月

25年も続く卒業生の行事「教育フォーラム」

八重山高校には、25年も続く卒業生の行事「教育フォーラム」がある。この行事は、八重山高校を卒業して25年後の43歳の同窓生が企画・運営する。企画・運営者が毎年変わるので、やり方が毎年変わるため在校生の評判は良い。

この教育フォーラムは、現体育館の落成式典（当時は伊波寛校長）が行われた1994年7月8日に先立って同日の午前10時に第1回が開催された。当時のテーマは「先輩は語る～卒業25年の集い～」で、第1回は21期生が後輩たちを激励した。新垣弘行氏（当時オキジム八重山支店長）をコーディネーターに、高嶺善伸氏（当時市議会議員）、西村庸夫氏（当時沖縄銀行石垣支店長）、仲原靖夫氏（当時ハートライフ病院長）、与世田兼稔氏（当時弁護士）、波照間永吉氏（当時県立芸術大学講師）、小浜清志氏（当時作家）、小底弘子さん（当時保母）ら7名がパネラーであった。

今年は第25回教育フォーラムで、第1回教育フォーラム時に当時高校3年生であった45期生が担当した。下の写真にもあるように、パネラーの服装も統一し、在校生に楽しんでもらえるような参加型の教育フォーラムであった。この教育フォーラムをきっかけに、八重山高校同窓会（尚志会）が尚一層団結し発展していくことを期待したい。



服装を揃えたパネラーの皆さん、とてもカッコイイ！



先輩方の話に聞き入る在校生

平成30（2018）年 7月

夏の甲子園に1番近かったあの日

今からちょうど30年前の昭和63（1988）年7月23日（土）は、八重山高校野球部が夏の甲子園に1番近かった日である。

第70回全国高等学校野球選手権記念沖縄大会は、昭和63年6月23日に開幕した。同年4月に、那覇在住の八重山高校同窓生が中心となり「八重山高校を甲子園に行かす会」が発足し、八重山高校野球部に対する支援体制が整いつつある時期でもあった。その支援を受けた八重山高校野球部は、瀬名波長宏監督の指揮のもと一戦ごとに成長し、強豪校を破り決勝まで登りつめた。まさに、「夏の甲子園に1番近かったあの日」があったのである。八重山高校野球部の当時の夏の戦いぶりは、次のようであった。

1回戦：八重高8－0コザ高校（8回コールド勝ち）

瓦投手がコザ打線に6安打を浴びながらも要所を締め、八重高は10安打で8点を取る効率の良い攻めで快勝した。

2回戦：八重高6－4首里高校

八重高は初回、先頭打者の伊舎堂が大会13号のホームランで先制した。その後、16安打の猛攻を見せ、七回から登板した大松の好投もありシード校の首里高校を退けた。

3回戦：八重山高校9－2那覇高校（8回コールド勝ち）ベスト8進出決定！

七回まで相手投手の緩急自在の投球に翻弄され、八重高1－2那覇高校であったが、八回打者一巡の猛攻で8点を取り逆転した。

4回戦：八重高5－4美里高校（延長11回）初のベスト4進出決定！

延長10回まで、八重高3－3美里高校であった。同点で迎えた延長11回表、八重高は一死から4番大浜のヒット、5番金城のヒットエンドラン崩れで二死二塁。このチャンスに6番瓦のセンター前ヒットで1点、相手エラーで3塁までいった瓦を代打唐真のヒットで2点目を入れた。その裏、先頭の豊見城高校4番柴引が大会17号のホームランを打ったが、無死一塁からリリーフした大松がピンチをしのぎ勝利した。

準決勝：八重高5－2豊見城高校 決勝進出決定！

一回の攻防が明暗を分けた。先攻の豊見城高校に1点を先取されたが、その裏、1番伊舎堂が内野安打、下地が四球の一死1・2塁のチャンスに4番大浜のヒットと瓦の内野安打で一挙に八重高3－1豊見城高校と逆転に成功した。その後、3回に2点を入れ八重高5－1豊見城高校と引き離した。瓦投手は、2回以降得意のカーブを要所に決め豊見城打線を翻弄した。9回に豊見城高校も意地を見せ1点を返したところで、リリーフした大松投手が抑えて振り切った。



決勝：八重高0－8 沖縄水産高校

強豪沖縄水産高校の前に力つきた。試合終了後、コザ高校戦から決勝まで6試合を投げた瓦投手は、「精一杯投げました。うれしいです、悔いはありません」と涙を拭いた。

今年は、第100回全国高等学校野球選手権沖縄県大会となる。あれから30年、再びあの日が来ることを期待し、今度こそ悔し涙ではなく、うれし涙を流してみたいと願っている。



平成30（2018）年 6月

八重山高校のカラーガード部がすごい！

放課後、管理棟玄関前で大きなフラッグが舞っている。八重山高校のカラーガード部の部活動である。小気味よいリズムに合わせ、20名を超える生徒がフラッグを振る様子は圧巻である。

このカラーガード部は平成17年度に発足している。当時、国語の教師であった赤嶺剛先生（現今婦仁村教育委員会）が、小中とマーチングバンドが強い石垣で何とかその受け皿を模索した結果、結成したのがカラーガード部だったそうだ。赤嶺教諭の呼びかけに応じ、当時2年生だった富村万理代さん（現県立高校養護教諭）を中心に部員が集まり活動が始まったそうだ。

八重山高校カラーガード部は発足以来県大会を勝ち抜き、マーチングバンド全国大会カラーガード部門（名称の変遷あり）において7回の金賞（全国2位含む）を受賞しており、県内でもカラーガードといえば八重山高校といわれるまでに成長した。今、カラーガード部は新入部員も含めた陣営で、11月に行われる県大会優勝を目指し、溢れる汗と戦いながら練習に励んでいる。

*八重山高校カラーガード部は、今年開催された第31回マーチングインオキナワ2018において全国大会の切符を獲得し、2019年2月3日に千葉県幕張メッセで開催される第2回カラーガード・マーチングパーカッション全国大会に出場する。



黒島口説（くどうち）に魅せられて！

八重山高校郷土芸能部が歌い演じる黒島口説（くどうち）は凄い。舞踊が良いのはもちろんだが、歌声はもっとすばらしく、多くの聴衆を魅了する。澁刺とした歌声は魅力的で、特に「いやい～や、豊かなる世の・・・」以降の歌声は、女性ならではの高音と力強さがあり、聞く者に感動を与える（と思う）。

私が八重山高校郷土芸能部の黒島口説（くどうち）を意識したのは、前回の八重山勤務6年の終盤（平成元年あたり）で、石垣市民会館で八重山高校郷土芸能部が演じた時であった。あの時から、八重山高校郷土芸能部の黒島口説（くどうち）に魅せられ、それが今回の再赴任の理由のひとつにもなっている。

※八重山高校郷土芸能部は、平成6（1994）年度第18回愛媛大会と平成14（2002）年度第26回神奈川大会において、全国高等学校総合文化祭郷土芸能部門最優秀賞・文部大臣賞を受賞し、東京公演（国立劇場）に参加している。

※今年の平成30（2018）年度の第42回全国高等学校総合文化祭信州大会において、5年前の平成25（2013）年度第37回長崎大会以来の全国3位の優良賞に輝いた。



平成30（2018）年 4月